

第八問 『十六夜日記』

次の文章は、『十六夜日記』の冒頭部です。作者の阿仏尼は、藤原為家(一一九八—一二七五)の側室ですが、為家の死後、荘園の相続問題を解決するため、鎌倉へ赴こうとしています。よく読んで後の問いに答えなさい。

昔、^(注1)壁の中より求め出でたりけむ書の名をば、^(注2)今の世の人の子は、^(注3)夢ばかりも、身の上のことは知らざりけりな。^(注4)水茎の岡の葛原、かへすがへすも^(注5)書きおく跡たしかなれども、かひなきものは親の諫めなりけり。また賢王の人を捨て給はぬまつりごとにももれ、忠臣の世を思ふ情にも捨てらるるものは数ならぬ身一つなりけりと、思ひ知りなばまたさてもあらで、なほ^(注6)この憂へこそやる方なく悲しけれ。

さらに思ひ続ければ、倭歌の道は、^(注7)あただまこと少なく、あだなるすさみばかりと思ふ人もやあらむ。日の本の国に、天の岩戸開けしときより、四方の神たちの神樂の言葉をはじめて、世を治め、物を和らぐるなかだちとなりけりとぞ、この道の聖たちは記し置かれたりける。

さてもまた、集を撰ぶ人は例多かれども、^(注8)二度勅を受けて、代々に聞こえ上げたる家は、類なほありがたくやありけむ。その跡にしもたづさはりて、三人の男子ども、百千の歌の古反古どもを、いかなる縁にかありけむ、あづかり持たることあれど、「^(注9)道を助けよ、子を育め、後の世をとへ」とて、深き契りを結びおかれし細河の流れも、ゆゑなくせきとどめられしかば、跡とふ法の灯も、道を守り家を助けむ親子の命も、もろともに消えをあらそふ年月を経て、あやふく心細きながら、何としていづれなく今日までながららむ。惜しからぬ身一つは、やすく思ひ捨つれども、子を思ふ心の聞はなほしのびがたく、道をかへりみる恨みはやらむ方なくて、「さてもなほ、^(注10)東の亀の鏡にうつさは、曇らぬ影もやあらはるる」と、せめて思ひあまりて、

よろづの憚りを忘れ、身を要なきものになしはてて、^(注11)ゆくりもなく、いさよふ月に誘はれ出でなむとぞ思ひなりぬる。

さりとして、^(注12)文屋の康秀が誘ふにもあらず、住むべき国求むるにもあらず。頃^(注13)は三冬立つはじめの空なれば、降りみ降らずみ時雨も絶えず、嵐にきほふ木の葉さへ涙とともに乱れ散りつつ、事にふれて心細く悲しけれど、^(注14)人やりならぬ道なれば、行きうしとてとどまるべきにもあらず、何となく急ぎ立ちぬ。

^(注15)目離れせざりつるほどだに荒れまさりつる庭も籬も、ましてと見まはされて、慕はしげなる人々の袖のしづくも、なぐさめかねたる中にも、^(注16)侍従・大夫などの、あながちにうち屈じたるさま、いと心苦しければ、さまざま言ひこしらへ、^(注17)聞のうちを見やれば、昔の枕の^(注18)エさながら変はらぬを見るも、いまさら悲しくて、かたはらに書きつく。

とどめおく古き枕の塵をだに我が立ち去らば誰か払はむ

(注)

- 1 壁の中より求め出でたりけむ書の名——『孝経』(古文孝経)。ここでは、「孝」という事柄を採り上げるために、中国の古典の名を援用した。
- 2 今の世の人の子——特定を避けた表現だが、為家と正妻との子である為氏をさす。荘園の相続問題で訴訟となり、阿仏尼と不和になった。
- 3 水茎の岡の葛原——藤原定家(為家の父)の「水茎の岡の葛原吹きかへし衣手薄き秋の初風」を序詞のように用いて「かへすがへす」へと続けた。
- 4 書きおく跡——為家の残した荘園・細川庄(兵庫県三木市細川町)の譲り状。

5 この憂へ——「此の憂へ」であり「子の憂へ」でもある。我が子を思う心遣い。集を撰ぶ人——勅撰集の撰者。

6 二度勅を受けて——為家が『続後撰和歌集』『続古今和歌集』の、その父・定家が『新古今和歌集』『新勅撰和歌集』の撰にたずさわったことをいう。

後の世をとへ——自分(為家)の後生をとむらえ、の意。

7 東の亀の鏡にうつさば——鎌倉幕府による正しい裁断をあおげば、の意。

8 文屋の康秀が誘ふにもあらず、住むべき国求むるにもあらず——康秀が三河の国に下るおりに小野小町を誘った逸話と、在原業平が京都を離れ新たに住む土地を探して旅立ったという話を受けた表現。

9 侍従・大夫——為家と阿仏尼との子で、為相と為守。

問一 波線部ア、エの意味を記しなさい。

問二 二重傍線部「思ひ知りなば」から助動詞をさがし、終止形・文法的意味・活用形名の順に答えなさい。

問三 傍線部A・Eをわかりやすく現代語訳しなさい。

問四 傍線部B・Dは、どのようなことを表していますか。わかりやすく説明しなさい。

問五 傍線部Cの「細河」は荘園・細川庄を指しますが、傍線部全体としてはどのようなことを表していますか。

か。わかりやすく説明しなさい。

問六 傍線部Fの「まして」の直下には作者の感慨が記されず、読者の読み取りにゆだねられています。その省略された感慨を的確に記しなさい。

問七 この文章を通して知られる作者の心情として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ① 夫とともに長く和歌の修行を積み、世間にも認められたといううれしい気持ち
- ② 二人の子とともに長旅に出るため、前途を心配する気持ち
- ③ 夫を亡くし、和歌の道のこれからを思い、さびしくて不安な気持ち
- ④ これから自らの和歌修行のために旅に出ようという、希望に満ちた気持ち